

「真宗儀式の教相 帰敬式をめぐる」

講師：竹橋 太氏（真宗大谷派儀式指導研究所 研究員）／ 2022 年 12 月 1 日開講

※名古屋教区教化センター主催公開講座「真宗儀式の教相 帰敬式をめぐる」を担当スタッフがデータ化したものに、竹橋太氏に手を加えていただきました。

※講師の肩書は講座開講当時のものです。

初転法輪で三帰依文をとなえて仏弟子となる

「真宗儀式の教相 帰敬式をめぐる」ということで、お話を聞いていただきます。報恩講が本山では11月28日まで勤まっていた。名古屋別院では今月に報恩講ということですので、皆さんお力をお尽くしいただければと思います。

「報恩講を勤める」と言うよりも、「報恩講が`勤まる、`」と言われます。阿弥陀さまの力で、歴史の力で、勤まると。普通に言うと私たちが勤める、ということですが、全体を見て、よく考えると「報恩講が勤まりましたね」ということになるかと思います。

ただいま三帰依文をパーリ語でとなえました。パーリ語というのは、お釈迦さまがお話しした言葉に近いと言われています。お釈迦さまがどんな言葉を話されていたかは、はっきりとは分からないんです。いま世界中の仏教徒がパーリ語の三帰依文を共通に使っています。Buddham saraṇam gacchāmi. Buddham、これはブッダ、「仏」ですよね。saraṇam というのは「帰依処」とか「拠り所」という意味です。gacchāmi は「私が行く」。二つの読み方ができます。「ブッダという帰依処に行きます」というふうに読めますし、「ブッダを帰依処といたします」とも読めるのです。二通りの解釈が可能です。どちらも意味は変わらないと思います。「私は仏を帰依処とします」、つまり「仏に帰依します」というふうに中国で訳されて、我々も「自ら仏に帰依したてまつる」と、そういうように読んでいるわけです。

お釈迦さまのお弟子は順々に増えていくわけですが、最初と一緒に修行していた五人の比丘が、お弟子になるわけですね。その時にもう一人、ヤサという、近所の町で遊んでいたお金持ちの若い男性が友達と、人生というのはつまらんものだと言いながらお釈迦さまに議論をふっかけた？そうです。そして、お釈迦さまのお弟子になった。

ある先生が次のようなことを言われています。五人の比丘は、お釈迦さまと一緒に苦行していたのですが、お釈迦さまは苦行をやめたのです。その五人は、お釈迦さまは堕落した人だから、あんな人と話してはいけないというのです。そう言っていた者がなぜか、お釈迦さまのお話を聞いて弟子になっていくのです。そうなのですが、そういう五人の比丘たちよりも、ヤサという人がお釈迦さまのおっしゃることがよく分かって、もしかしたら先に弟子になったのじゃないかと、言っています。少しわかるような気がします。

ごく初期に弟子になった、そのヤサの家族が、この三帰依文をとなえて、お釈迦さまの在家の弟子になったのです。だから、お釈迦さまが僧伽をつくられたごく早い時期、初転法輪をした時から、間もない時期に帰敬式というものはあったのです。帰敬式というか、三帰依文をとなえて在家の仏弟子になる、そういうことが仏教のごく最初の歴史のところから始まっているのです。

反省は思い上がり

皆さんはどういうふうにお考えでしょうか。仏教の歴史と浄土真宗、あまり関係ないというふうに思われますか。真宗は仏教なのですが、一体どこが仏教なのか。お釈迦さまの教えと親鸞さまの教えは、どう関係があるのか。

我々の信心ということ言えば、親鸞聖人の『正信偈』、そして南無阿弥陀仏というお念仏があれば十分だと思います。お釈迦さまのことを知らなくても、ご信心は成り立ちますね。

仏教とは何か、お念仏とは何かと考え始めた時にそういう問題が大きく出てくるのだろーと思えます。仏教の教えを聞くとか、真宗の信心を獲たら、その瞬間に悩みが消えたという、そういう方はいますかね。ある時、お内仏で手を合わせて南無阿弥陀仏と称えていたら、阿弥陀さまがピカッと光って、「お前はいま救われたぞ」といわれて、自分の心の中がスキッとして悩み一つなくなった、そういう経験された方はいますか ____。いないと思うんですね。

私は浄土真宗というのは仏教そのものだと思っています。その立場からお話をさせていただくわけですが、「仏教は生き方を教えるものではない、人間であることを問題としている」、といつも申し上げています

皆さんの中で歩いていて電信柱にぶつかったことがある方はいらっしゃるでしょうか。僕、二回もやりました。どっちも中学生の時で、一回目は本を読みながら歩いていて、もう一回は友達としゃべりながらですが、かなり痛いんです。相手はびくともしませんから。では、自転車で転んだことはありますか。どうでしょうか？ その時には、どうしますか。ガシャンと転んで、よっぽど痛ければ転げまわるんですが、ちょっとぐらいたとイタタと言って、その後、何をしますか。大概の人は周りを見回しますよね。恥ずかしくて誰かに見られてないかと。

「恥ずかしい」という思いはどこから来ますか。誰かに見られてないかとか、そして人に見られていなくても顔は真っ赤になっているんですよ、転んだすぐ後で。自分が転んだことを、自分で見ることができるということです、ああ恥ずかしいことを自分はしたなど。

人間は、自分のやっていることを自分で見ることができるわけです。この“自分を見る目、は世間の目と重なっているわけですね。自分が悪いことをしないように、自分がよりよく生きようと思っているんです。世の中の人の善悪という基準や価値観、そういうものが自分の中にありますね。それが私たちの持っている善悪そのものになっていますね。だからこそ迷うんです。その善悪、つまり「よりよく生きる」が、本当に正しいかどうかなんて誰も証明できませんし、そんなことはあなたの独りよがりだと言われるかもしれません。でも他の人に、何か問題を指摘されたら、聞い

て、なおして、さらによりよくしようとする。人間はそうやって世の中を大変便利なものにしてきました。

何か困難があったときに、こういう道具や機械があったらいいなと考えます。そして実際にそれを作ってきました。自分のやっていることを観察して、少しずつ世の中をよく、便利に改良してきました。この百年で世の中は本当に便利になったと思います。ですから、仏教のお話を聞くのも、この「自分をよりよくしたい」というところで聞くこともできるわけです。でも、そうではないということをお話ししたいんです。

自分で自分を正してゆく、失敗をして、たくさんの経験を積んで、よりよい自分になっていくということですね。失敗をたくさん経験して、それを乗り越えてきた人は、たぶん世の中では経験のあるいい人だということになると思います。実際にそうして我々は成長していくということもあると思います。

しかし、仏教には「増上慢」という言葉と「卑下慢」という言葉があるんです。増上慢というのは、「私はすごいんだぞ」、ということです。仏教で言うと、覚っていないのに覚ったというのを増上慢という、こういう定義もありますが。自分が何かして、うまくいって、自分ってすごいと思うことが増上慢。「慢」というのは簡単に言うと「思い上がり」です。

逆に「卑下慢」という言葉もあります。「自分はダメだ」というのも思い上がりだということです。お判りでしょう、「自分はダメだ」と判断しているのも自分だからです。人間はどこかに正しさを残しているから「自分はダメだ」と言えるのです。完全に自分を疑いきることはできません。

普段の自分は、自分をよりよくしようと思って、善悪を考えながら、行動しています。でも、そんなものはあなたの考え方でしょうと言われて、自分の考え方はダメだったんだと分かる、そういう経験をします。自分が破られるような経験をします。そうするとどうなるかという、それを見るもう一つの自分が外側に生まれて、自分がダメだと分かった経験をした自分は正しい、というふうに考えるようになります。完全に自分を疑うことはできないのです。必ずそうやって、正しさを残すことになっています。人間はこうしないと病気になるんだと思います。自分は正しいといつでもどこかで思っていないと、不安で不安で生きられないんじゃないかなと思います。そういうふうに出てくるのだと思います。

例えば、今のような話をした時に、私は凡夫ですからそんな難しい話は分かりませんとおっしゃる方もいるわけです。自分で「私は凡夫だ」と言っているわけですね。ダメだと言えるということは答えを知っているということです。私はダメだと落ち込んでいるといっても、落ち込ませている自分は正しいところに立っているわけです。だから、自分をダメだというのも思い上がりなんです。ちょっと厳しいですね。

宗憲が定める帰敬式

そういう意味で、どうしても自分自身を疑い切ることが出来ないのが人間だと思います。人間そのものが自分自身を疑い切ることが出来ない、そういう存在なんだと、まずそれを知る。それを知

るということは頭が下がるということです。それがご信心をいただくということだと思います。

頭が下がっても次の瞬間には、こんな大事な仏法の話なのに誰も聞きに来ない、とかいって他の人を批判する。自分がいつでも正しい立場に立ってしまう。そういう問題を抱えている、そういう構造を持っているのが人間だということです。知識を蓄えてよりよく生きていく、これは理性という立場でもそうだと思います。よりよい私をつくっていくということですが、その構造そのものに問題がある。そういうことを生死輪廻といたりするわけですけど、要するによりよく生きるということから離れられないわけです。よりよくというのは自分の中にしか答えがない。それは違うと言われてハッと気づいても、次の瞬間にはその経験は自分のモノになって、自分が壊された経験をした自分は仏教に出遇った正しい人なんだと、こう思ってしまう。そういうことを繰り返す。どうしたって自分が正しいというところを出られない。それを鏡で見せられて頭が下がる瞬間を南無阿弥陀仏というんだと思います。

そういうわけで、仏教そのものは生き方ではなくて、人間であること、そのものが問題なんだというわけです。だから答えはないんですね。どうしたらいいか？ どうにもならないんです。南無阿弥陀仏といって頭を下げる、そこ以外に浄土真宗は何もないんです。そして生き方は、凡夫である私が自分で決めるしかないんです。そこには限界があるということを知る。知って生きる。自分は絶対に正しいというところには立てないんだと知りながら生きていく。仏教によってこうする、という答えはないんです。これは正しいと自分は思うから今回はこうする、というしかない。真宗ではこういうことをしていいんだろうとか、仏教ではこういうことをどう考えるんだろうとか、皆さんおっしゃるんだけど、そういう答えのようなものはないのだと思います。どうしたって煩惱が雑じる。本当に正しい答えなどというものはない。そういうことを知った上で行動していく。

そういうことが我々に求められるんじゃないかなと思います。仏教を学ぶと答えが分かって、こういうふうにしていけばいいとか、真宗を学べばこういう問題にはこう答えるべきなんだとか、そういうことを我々は求めますけれども、そういう考え方はどうも違うように思います。それぞれの人が自分のあり方によって色んな考え方があって、それはどれもダメだとも言えるし、よいとも言えると、そういう面があるんだと思います。逆に言えば、そういう限界がある。そういう中で我々は力を尽くしていく。そういう生き方をしていくのが仏教に出遇うということなのではないかなと常々思っています。

そうやって頭が下がる、そういうことを表明するのが得度式であったり帰敬式であったりするのです。では、頭が下がらなかったら帰敬式を受けちゃダメとか、信心を獲ていないのに得度式を受けてもいいんだろうとか、そういう問題があると思います。

真宗大谷派の宗憲では三つの儀式が定められています。1981（昭和56）年にできました。前文には、「第一に、すべて宗門に属する者は、常に自信教人信の誠を尽くし、同朋社会の顕現に努める。」と書かれています。こういう目的を果たす為に様々な教義や儀式が位置付けられているのです。儀式については第十二条にこう書かれています。

第十二条 本派の儀式の主なものは、次のとおりである。

一 法要式 二 得度式 三 帰敬式

- 2 法要式は、仏祖を礼拝し、所依の聖教を読誦し、佛徳を讃嘆して報恩の誠を尽くす儀式である。
- 3 得度式は、本派の僧侶となる儀式であって、御影堂において門首がこれを行う。
- 4 帰敬式は、本派に帰依の誠を表わす儀式であって、門首がこれを行う。ただし、住職及び教会主管者は、門徒の希望により、これを行うことができる。

これまでは一般の寺院の住職さんには、亡くなった方に法名を授ける形での帰敬式は認められていました。帰敬式実践運動が始まり、それ以降、このただし書きによって、生きている方にも帰敬式ができるようになったのです。

「帰敬式は、本派に帰依の誠を表わす」。これについて異論のある方もいらっしゃると思います。三宝に帰依するということなんじゃないのかと。正しい答えはそちらのほうだと思います。もう少し広く考えていただいて、本派という宗派の中に三宝ということを含んでいっていると考えていただきたいと思います。法律という形式上、こういう形をとらざるを得ないようなところがあると思います。

帰敬式については、宗憲の中にもう一つあるんです。「第九章 僧侶及び門徒」の「第二節 門徒（門徒の任務）」第八十二条です。

教法を聞信して真宗本廟に帰敬し、寺院又は教会に所属する者を本派の門徒という。

- 2 すべて門徒は、帰敬式を受け、宗門及び寺院、教会の護持興隆に努めなければならない。

ご門徒といわれる方は皆さん帰敬式を受けてくださいということです。門徒は必ず受けなければいけないのだと、読もうと思えば読めますけれども、これは法律の解釈ということで、皆さん受けていただくことが願われていると、そういうことだと思ってください。ただ、宗派の根本的な法律である宗憲にこういうふうに書かれているんですね。そういうこともあって、帰敬式を門徒のみなさまに受けていただくということは、宗派にとっては大変大きな仕事であるわけです。門徒さんだけに受けなさい、というわけじゃなくて、受けられるように環境を整え、そして受けたいと思ってもらえるような、そういう形にしていく、逆に言えば、そういうことが僧侶の務めでもある。そうやって僧侶と在家の方を分ける必要もないんでしょうし、魅力のある宗門であれば、帰敬式というものを受けていきたいと、自然とそういう方向になっていくのかなと思います。これは得度も同じようなことだと思います。とにかく宗憲の中で三つの儀式がこういう形で定められているということを知っておいてください。

『改邪鈔』の戒め

次いで法名についてお話しします。本山で受ける帰敬式の法名は、昔は本山が定めておりました。今はさまざまご意見をいただいて、変わってきました。基本的には「釈（釋）〇〇」というふうになります。三文字なのは、中国の名前を真似しているからです。中国の人はだいたい一文字の名

字です。そして後ろに名前が来ます。その形を踏襲しているんです。「釈」というのは名字で、お釈迦さまの一族の誰々と。これが基本的な法名の形です。

女性の場合は「釈尼」。今でも我々は親鸞聖人の奥様を恵信尼さまといいます。だから「尼」が後ろに付くのが話としては分かりいいと思います。釈尊の弟子で何々という女性、という感じです。今は、女性だからといって「尼」を付けなくてもいいのではないかとか、そういうご意見もあります。その辺りはいろいろ検討もしていますが、宗派では基本的な方向は示していません。ただ、対応の上で少し柔軟かくしていこうと、そういう流れになっています(2025年 どちらも自由を選ぶようになりました)。尼というのは比丘尼ということで、それは出家した女性ということですので、本当は僧侶の場合に尼と付くんですね。在家女性の場合は優婆夷といいます。けれども得度式でも帰敬式でも区別なく、同じ形の名前をいただくことになっています。

だから、帰敬式で法名をもらうことも、得度式で法名をもらうことも、重さは同じなんです。ただ、形がお坊さんになるか、門徒のままでいるかと、そういう違いだけです。目指すところは一緒です。僧侶ということは法律上のことでいろいろありますし、責任もある、それからお寺を運営・経営していくということもある。そういうことで意味合いが違っているんですが、法名というところにおいては同じです。僧侶であろうが門徒さんであろうが何も違いがないというのが、もともとの考え方だったんだと思います。法名は、釈尊の家族だと、そういう意味で釈という字を名字にすると、そういう形です。

帰敬式を考える上で、『改邪鈔』の戒めが参考になります。『改邪鈔』というのは親鸞聖人のひ孫である覚如上人という方が書かれたものです。覚如上人は親鸞聖人が亡くなってから十年後に生まれた方で、お祖母さまの覚信尼さまを助けて今の本願寺のもとをつくられました。お父さんは覚恵さんといいます。『改邪鈔』は“邪を改める、”という意味の書名です。『歎異抄』は“異なるを歎く、”。これは似たような名前です。邪を改める、こんなことは、よくないよというような感じで書かれています。しかし、目指すところは、浄土真宗というのはこういうものなのだと表現することだと思います。

『歎異抄』のほう 皆さんには有名ですが、『改邪鈔』は本願寺をつくられた覚如上人が書かれたものだから、当時の様子もよく分かる、たいへん大切なものです。それから、覚如上人がいなかったら本願寺もありませんので、大変な方です。文章もよく書かれて、『御伝鈔』とか『報恩講私記』等を著されています。それも、『報恩講私記』などは24歳(数え年)で書かれているんです。日本の歴史に残るような美しい文章です。それを24歳の若い人が書いて、今でも報恩講で読まれている。早熟な天才だったといわれています。

その覚如上人が、浄土真宗で今ごろ流行っているけれども改めるべきことをあげて、『改邪鈔』ということで書かれているんです。『改邪鈔』第十章を見てみましょう。

一 優婆塞・優婆夷の形体たりながら、出家のごとく、しいて法名をもちいる、いわれなき事。

(『真宗聖典』第二版 833 頁)

ごく初期の浄土真宗教団、親鸞聖人の教えを信ずる方々にもたくさんのグループがあったんです。本願寺というの、また一つのグループだったんですね。それがだんだん集まって一つになっていたり、いろいろな派になっていくわけです。優婆塞・優婆夷というのは在家の仏弟子です。だから、今でいえば帰敬式を受けたとか、浄土真宗の門徒ですと自らおっしゃる方、そういう方が優婆塞・優婆夷です。僧侶は比丘・比丘尼といいまして、そういう出家した者と分ける。この『改邪鈔』第十章は、普通の門徒であるのに無理やり法名を用いる、それは「いわれ」、適当な理由がないんだよということで、戒めていらっしゃいます。

これは帰敬式と全然違いますけど、読んでいくとなるほどと合点がいくかと思います。自覚として、本当に親鸞の門徒だというふうに法名を名のっているんじゃないくて、法名をもって私は浄土真宗の門徒なんだよと誇っている。そういう法名の名のりだけを誇りにして威張っているような人たちが実際にいた、そういう人を戒めるということです。

一 優婆塞・優婆夷の形体たりながら、出家のごとく、しいて法名をもちいる、いわれなき事。本願の文に、すでに「十方衆生」のことばあり。宗家（善導）の御釈（玄義分）に、また「道俗時衆」とら（等）あり。

釈尊四部の遺弟に、道の二種は比丘・比丘尼、俗の二種は優婆塞・優婆夷なれば、俗の二種も仏弟子のがわにいれる条、勿論なり。 (『真宗聖典』第二版 833 頁)

法名を持っていなくても、在家だからといって、仏弟子ではないということではなくて、在家でも仏弟子なんですと。十方衆生といわれているのだから、そんなことは当然であると。

続いて「不思議の仏智」という言葉が出てきます。不思議の仏智を疑う我々を仏教に導いてくださったのが聖徳太子さまだというのが親鸞聖人の考え方ですね。聖徳太子和讃の中に出てくるんですね。みんながすくわれる、どんな人もすくわれるなんて、そんなわけないだろうと私たちは思いますね。親鸞聖人もそう思った。そういう自分を常に仏法に戻してくださった方が聖徳太子だと仰がれていると、そういうことがあると思います。その不思議の仏智をいただいて実際にお念仏をとなえている出家・在家の男女は、普通の凡夫のすがたを超えて優れているだろうか、いや同じに決まっている、と『改邪鈔』では続いています

法名を持ったからといって偉いわけじゃない

先ほども申したように、お念仏をいただいたからといって偉くなるわけじゃないんです。浄土真宗の教えを聞いて、人間が、ちょっと上に上がったなと思っている人は、危ないです。お念仏の教えが分かったような気持ちになって、ちょっとうれしくなるということはあるかもしれませんが。ある先生は、「凡夫に成長してすくわれる」というんですが、それは違うと思います。凡夫でしかないんですよ。成長なんかしないんです。凡夫であるその一事にとどまると言うか、そのことに気づいて、そこに落ち着くと言うか、ほんとに凡夫なんです、それ以外何者でもないんです。真宗の教えを聞いて目の前の霧がぱっと晴れたような気がした時に、なにか素晴らしい者になったような気

がするということがあるそうです。それは一週間ぐらいしか続きません。続かないのが当たり前です。今は亡き訓覇信雄という方が、そういうのは“コカ・コーラ信心”とおっしゃったそうです。スカッとさわやか、一瞬だけと。そういうものはすぐ忘れる。今度はそういう経験を求めるようになってしまう。そうではないんですね。

だから、凡夫なのに凡夫でないように思ってしまうというのが、出遇ってからの問題ですね。だからこそ、いっぺん出遇えば少しずつ聞法が出来るようになる。南無阿弥陀仏のいわれを聞くことが出来るようになるというのが浄土真宗です。お念仏を称えてすくわれるんじゃないんですよ。お念仏がすくいを表現しているわけです。

だから、南無阿弥陀仏は“答え、なんです。先程から言っているように、我々の自力で南無阿弥陀仏と称えたからすくわれるとか変わるとか、そういうことではなくて、変わらないというところをはっきりと教えられて、頭が下がる、でも、それが分かるとまた善に向かおうと、上に行こうとするのだけれども、また、もとの、つまり凡夫に還っていく、そういうことが南無阿弥陀仏ということで表現されているわけです。

だから、出家・在家の男女は普通の凡夫のすがたを超えて優れているだろうか、いや同じだと。凡夫であることにはまったく変わりがない。ただお念仏をいただいているかどうかという違いがあるだけだと。根性は変わらないでしょ。あれが欲しいこれが欲しい、あの人より良くなりたいというような根性は、お念仏の教えをいただいて頭が下がったからといって、なくなるじゃないですか。なくなるんなら、偉くなったと言っていいと思います。なくなるということが分かるということが、浄土真宗のご信心ですよ。なくなるということに開き直るのでもないんですね。なくなるらないんです、ほんとに。「そのままでいいんだ」、というのも自分の答えです。ふんぞり返っているだけです。どうしてもそういうふうになっていくように出来ています。ときどき下ろされる、知らされる。そういうことがお念仏の教えだと思います。

その形体においては、しばらくさしおく。仏、願力の不思議をもって無善造悪の凡夫を攝取不捨したまう時は、道の二種はいみじく、俗の二種が往生の位に不足なるべきにあらず。

（『真宗聖典』第二版 833 頁）

別に法名がないからといって、お坊さんじゃないからといって、往生という点においては何にも変わらないんだと。お坊さんだから優れているとか、在家だから劣っている、そんなこと全くありませんとおっしゃっています。

その進道の階次をいうとき、ただおなじ座席なり。しかるうえは、かならずしも俗の二種をしりぞけて、道の二種をすすましむべきにあらざるところに、女形・俗形たりながら法名をもちいる条、本形としては、往生浄土のうつわものにきらわれたるにいたり。

（『真宗聖典』第二版 834 頁）

僧になることを勧めはしないにも関わらず、女性、俗人であるのに、わざわざ法名を用いるのは、本来そのままでは、往生浄土の資格のあるものではないということになってしまうであろう、とい

うことです。

ここで女性を男性と区別しているのは、当時の女性観が反映されています。現代では、問題のある表現だと思います。

さて、そういうふうにわざわざ法名を名のるということは、法名を名のらないと、俗人のままではすくわれないといっているの难道うかと。それを批判しているわけです。法名を名のっても、名のらなくても、すくわれるものはすくわれるよと。同じだと。凡夫だというところに立つと。そういう言い方です。

ただ男女善惡の凡夫をはたらかさぬ本形にて（男女善惡の凡夫であるということを区別しないそのままの姿で）、本願の不思議をもって、生まるべからざるものを生まれさせたればこそ、超世の願ともなづけ、横超の直道ともきこえはんべれ。この一段、ことに曾祖師 源空 ならびに祖師 親鸞 已来、伝授相承の眼目たり。あえて聊爾に処すべからざるものなり（軽率、簡単に考えてはならない）。
（『真宗聖典』第二版 834 頁）

ここで問題になっているのは、僧侶であろうが僧侶でなかろうが同じ凡夫だということで、法名をもって私は偉いんだよと言っている門徒さんのことを批判しているのです。坊さんも坊さんだからといって、みんなを導くような素晴らしいものであるというような慢心はあり得ないと、そういうこともおっしゃっていると思います。たいへん大事なことを指摘していらっしゃいます。道・俗を無理に一緒にしなくてもよい。法名を誇ってはならないということです。

浄土真宗の歴史という中で、覚如上人がおっしゃっている「道」というのは、ちゃんと頭を剃った人たちです。というのは、当時、浄土真宗はまだ天台宗の中にあったからです。蓮如上人の頃まで天台宗の寺院ですから、道といわれる僧侶、比丘・比丘尼といわれる人たちは頭を剃った。ところが、地方の道場で言えば、毛坊主というような言い方もあるんですけど、法名だけ持って一般の姿をしたような人たちが道場をつくり、それがお寺になった。今のこの浄土真宗があるのは、そういうことのおかげである、ということもいわれています。覚如さんについてはまだ完全に天台の考え方で、道といえば頭を剃ったお坊さん、俗はそうじゃない人。ただ、俗で法名を持ったような人たちが浄土真宗を荷って、浄土真宗が広がっていったという歴史もおそらくあると思います。でもそれは、いいも悪いも事実ですし、覚如上人はわざわざ、法名を用いて誇っていると、そういうことを批判していらっしゃいます。

阿弥陀さまが儀式にまでなってくださった

法名を名のる必要もない。三帰依をとなえる必要もない。念仏一つで十分。ただ、念仏も要らないという言い方をする先生もいるんですよ。親鸞の限界は念仏を捨てられなかったことだというふうに言っている先生もいるんですね。念仏というのは儀式の一番極端な、切り詰めた形です。阿弥陀さんにむかって南無阿弥陀仏、手を合わせて頭を下げる。これもやっぱり儀式の形の一つです。要するに、そういう形でも、まだこだわりなのであって捨てることが出来ないと。今の覚如さんの

話でいくと、それを突き詰めていけば形なんて関係ないというふうになるというわけです。だからお念仏だって要らないというところまで行きつく方向性が有るのです。お念仏のいわれ、教えとして言おうとしていることが分かれば、形は要らないんだという答えまで行ってしまいます。そういう考え方で、日本の古いものはずいぶん壊されたんだと思います。形がなくてもその意味が分かれば、形は要らないんだと。

でも、形と意味はそんな簡単には分かれないうです。形をなくしたら意味も一緒になくなっていく。親鸞聖人は南無阿弥陀仏ということは残しています。だから儀式的な要素を残しているという言い方も出来るんです。だから、覚如さんはお念仏が要らないとは言っていない。ただ、法名を名の必要ないじゃないか、浄土真宗に出遇えばそれでいいと。それはお坊さんだって同じです。お坊さんになる必要もない、法名を名の必要もない、念仏一つで十分、そのようなところでしょうね。けれども、これを言うとお寺も要らないんですよ。浄土真宗の教えということ言えば、それも一つの考え方だと僕は思っています。お寺もなくてもいい、教え一つあればいい、お念仏一つでいいんだと。そういう考え方も成り立つと私は思っています。ただ、お寺という形を持ち、華やかなどいえるような儀式をする、それはなぜか、ということがあります。

それは阿弥陀さまが、そういう我々に、どのような形をとって現れてくださるのかという問題。方便という問題なんです。さらには還相廻向の問題です。還相回向というのは仏さまの説法ということです。やはり阿弥陀さまが、私たちに現れてくださるということです。それを私がいただくということです。私たちがいただかないと現れたことにならないですから。

然れば、弥陀如来は如より来生して、報・応・化、種種の身を示し現したまうなり。

(『真宗聖典』第二版 320 頁)

阿弥陀如来というのは、形も何にもない真実そのものなのだけれども、私たちに合わせてどんな形もとってくださると書いてあるんです。

肇公の言わく（注維摩詰経序）、「法身は像なくして形を殊にす。並びに至韻に応ず。言無くして玄籍弥いよ布き、冥権、謀無くして動じて事と会す」と

(『真宗聖典』第二版 331 頁)

(肇公はこう言われる「法身は像（かたち）がないことによって殊（すぐ）れた形を表わす、またそれは、このうえない韻（ひびき）に应じている。言（ことば）にはならないものが籍（ふみ）として玄（あらわ）されてますますひろくいきわたり、知ることのできないはからいは、謀（はかりごと）なく動いて仏事とかなう」と)

それは出遇った人にとっては、何にも要らないということがあるかもしれませんが、出遇う為にはどんな形にでもなってくくださる。どんな形にも、ということは、これは我々人間の欲望・煩悩が背景にあります。欲望に合わせた形になってくださる。人間は仏教が生まれてくる前から、葬儀など種々な儀式をしていました。今の言い方で言えば、阿弥陀さまが葬儀にまでなってくくださった。儀式にまでなってくくださった。それが親鸞聖人の方便というものに対する考え方です。我々はすぐ、浄土真宗とはこういうものだとか分かってしまうと、これも要らないと自分のほうから言っていくわ

けです。そうではなくて、仏教そのものはどんな形にもなって、真実そのものはみんなに気づいてくれという形で、どんな場所にもあるんだよと。だから、人間がしている葬儀の儀式というものにまで真実そのものがなったださっている。だから、葬儀を真宗の仏事にする、という言い方をするんですね。葬儀というのは歴史上、何万年も人間がしてきていることです。挨拶なども同じことです。そういうもの、そこに浄土真宗が現れてくる。我々に合わせて形が変わってくださる。そういうことをおっしゃっているわけです。

儀式というもので我々はコミュニケーションをとったりします。ただ、儀式の前提には共同体というものがあります。仲間があって、その誰かが死んだから葬儀をして、その人がいない新しい世界を始める、ということをする。その人を思い出にしたり、仏にするという形で、送って、またここで我々は暮らしていく。そういう工夫をしていたんですが、今は共同体というものが成り立たなくなってきました。葬儀が“家族葬”になるのは、家族が最後の共同体ということだと、そういうことを表わしているんですね。僧侶がサボったということもあるかもしれませんが、世の中の流れによっていると、そういうふうを考える必要もあるわけです。

これからどういう浄土真宗になっていくのかということも、僕が心配しなくても阿弥陀さんはどこにでも、どんな形にでもなって現れるんだと。そういうものだと教えられているわけです。お寺ということに関して言えば、明るい話は、一切ないですね。今後、急激に変わるかもしれません。しかし、浄土真宗そのものはいろいろな形になって、どこにでも現れるというわけです。

頭が下がるという形を真似する

お念仏は、すくわれた瞬間、頭が下がった瞬間を「南無阿弥陀仏」として表現しています。阿弥陀さまに全てをお任せしますとか、ごめんなさいとか、ありがととか、そういうことを表している。手を合わせて頭が下がっているんです。頭を下げるのではないのです、下がっているんです。自分が正しいというあり方そのものが違うんだと知らされて、頭が下がる。その瞬間を表現しているわけです。だから、私たちの頭を下げてくださるはたらきを阿弥陀さまというのです。阿弥陀さまはどこかにいるわけではありません。私の頭が下がった時に、その頭を下げてくださったはたらきを阿弥陀さまというだけです。その形を真似て、手を合わせて、南無阿弥陀仏と声に出す、下がらない頭を下げるような工夫が、こういう形でされているわけです。普段からそれを繰り返すことによって、その瞬間に還っていくという方向性を感じてゆくわけです。

そういうことは、簡単な言葉で言うと“教育のシステム”、と言ってもいいかもしれません。儀式という形、お仏壇の前に座って手を合わせるという形で、南無阿弥陀仏という形を真似ること、頭が下がるという形を真似ることによって、頭が下がるはたらきを体験していく。儀式とはそういうことなのだと思います。その形は、手を合わせて頭が下がっている形、南無阿弥陀仏です、すくいそのものです。浄土真宗にはこれ以上の表現はないんですね。それは成就したものです。それとして成り立っているわけです。それを真似て、その世界に入っていくということです。お内仏に手を合わせる家族の背中を見て、それを真似て行くそういうことができるわけです。

それを自らに課していくというのが帰敬式。目的と手段を取り違えてはいけません。念仏者誕生の為の帰敬式なんです。お念仏の人が誕生していくのであれば、帰敬式の意味があります。帰敬式を受けた人がたくさんいたほうがいいとか、そんなことはありません。帰敬式を受けなくても念仏者になるという人はそれでもいいわけです。ただ、そういう形を真似していくことによって、その世界に入っていくということが、帰敬式ということです。ご信心を獲ないと帰敬式を受けられない、我々僧侶も、ご信心を獲なかったら得度できないとか言われたら、ほとんどの人が得度できません。得度して、形の中に入っていって、そこで育てられる。そういう感じです。それはそうですよ、浄土真宗のお坊さんでも何万人もいるわけですから。ただ、そういう形を、答えである形を先にとる。「釈〇〇」といって、お釈迦さまの弟子になる。お釈迦さまの言葉・教えは何も知らなくても、形を先にして、そこで育てられていく。それが帰敬式の一つの意味だと思います。

帰敬式も儀式です。阿弥陀さまがそういうものになってくださっている。そういうふうに我々はいただく。そういうことが大切なのだと思います。

成就のすがたをとるわけです。信心をすでに頂いている姿をとるわけです。これはとっても大事なことなんです。これが浄土真宗の儀式の基本です。得度式もそうです。得度というのは「度（わた）る」ことを「得る」ということですから、度（わた）るということは、もう浄土に往っているということです。浄土に往ったすがたをいただくのです。帰敬式も、もう帰敬したということです。お釈迦さまの言葉や親鸞聖人の言葉を知らなくても、それに頭が下がったという形をとって、弟子となった形をとるということです。お念仏もそうです。阿弥陀さまがどんなものか分からなくても、頭を下げて南無阿弥陀仏という形を真似してみる。凡夫として仏の前で頭が下がっている。凡夫として照らされている。そのすがたを南無阿弥陀仏というわけです。阿弥陀さまに照らされて、南無して、頭が下がっているという形です。

だから、それは“結果、なんです。念仏がすくい”原因、であるとすれば、南無阿弥陀仏を百回称えたからすくわれるとか、千回称えたからすくわれるとか、というふうになる。念仏をすくいの原因とする考え方です。今で言うと、お金を使うとポイントが付くのも同じです、善いことをたくさんすると、ポイントがたくさん貯まって、そのおかげで浄土に行ける、そういうような考え方です。神社に行って、子どもが受験だからといって、普段は百円のところを千円入れる、それが我々の心ですね。多く入れたから、いいことが起こるだろうと。南無阿弥陀仏と称えたから、いいことが起きるとか、お寺参りしたからいいことが起きるとか、そういうふうに原因としてお念仏を考えてしまいます。そうではありません。全て結果としてあるんですね。すでにすくわれたというすがたです。それが形として表わされている。

だから逆に言うと、服に体を合わせていくような、そういうやり方です。職人さんの世界でも、形を真似するところから始まります、親方の言うとおりに全部やる。自分の考えではこうしたほうがいいなと思うけど、そういうことをしたら怒られる。そしてその形の合理性に気づいた時に、初めてハッと思う。ああそういうことだったのかと、全部が分かった時に、一度にその意味が分かる。

そのようなシステムでもあります。積み立てていって理解するという形もありますが、形を真似ることによってその世界に触れていくというあり方は芸能や技術、そういうところではよく用いられている教育のシステムでもあります。いずれにせよ、“果”、“答え”であるすくわれたすがたが南無阿弥陀仏です。そのすくわれたすがたを真似していく。ふだんの生活では、真似でも我々の頭が下がるなどということはないわけです。下がるという形をまねる場所がある、それが大切なことなのだと思います。

成就のすがた。それが果であるから他力と言えるんですね。私が念仏したからすくわれるといえれば自力です。すでにすくわれたという形を真似していく。阿弥陀さまはもう現れている、それに合わせていくことによって世界が開けてくる。そういうことが他力といわれているわけです。三帰依文も「仏法聞き難し、いますでに聞く」といっていますよね。帰依します、というのもそうです。心の底から帰依できていないのにするんです。南無阿弥陀仏と思っていなくても、南無阿弥陀仏となえて頭を下げてみるんです。そういう形を真似るところから入っていく。そういうことをしている親や祖父母、そういう方たちを信頼しているわけですから、真似をすることによってそういう世界に入っていく。そういうことでもあるわけです。

私は真実のほうに一步でも行かないようにしている

帰依というのは、それは仏と凡夫の同時成立です。例えば、

誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快まざることを、恥ずべし、傷むべしと。

(『真宗聖典』第二版 285 頁)

親鸞聖人がご信心を述べているんですね。悲歎述懐というふうに言われているのですが、親鸞聖人はいつも、信心を獲たからこそ、自分というものは仏法に全く出遇っていないんだということをおっしゃるわけです。本物に出遇ったからこそ、自分は偽物だと分かるということです。

「本当に本当にわかった。悲しいことである。私は愛欲の広い海に沈んで、浮かび上がることもない、人によく思われたいという思いの深い山に踏み惑って出ることもない。仏になると定まった人の仲間に入ったことがうれしくもない、真実のさとりに近づいていることも楽しくもない。ああ恥ずかしいことだ、傷ましいことだ」、これが、ご信心なんです。

こうやって愚かであると照らされたことが、うれしいことでもあるんです。真理に出遇ってうれしい。この愚かな私だといいただいたことがうれしいと。

だから頭が下がった時、自分が偽物だと思えた時には、本物に出遇っているわけです。本物と偽物というのは別々にはないんです。阿弥陀さまと凡夫というのは別々に存在しないんです。阿弥陀さまは、私の頭が下がったところにしかいらっしゃらないんです。逆に言うと、どこにでもいらっしゃいます。私の頭が下がりさえすれば、どこにでもいらっしゃるのです。「何にでもなったださる」というのはそういうことです。だから、それが帰依ということであり、信心ということです。

しかし、次の瞬間に、私は自分が愚かだと分かった、と立派な人間になってしまうのです。人間はそういうふうに出来ているわけです。それをまた愚かだと気づかされる。繰り返す、そういう歩みしかないんですよ。でも、暗いわけじゃないんです。一度そういうものに出遇うと、またやったなということがいただけるというか、ちょっとだけ、よい風が吹いてくるというようなことだと思います。苦しい悩みがあつて浄土真宗に出遇ったからといって、何にもいいことがないんですよ。ただ少しだけ自分の姿が見えてくる、そういうあり方だろうと思います。

真実と私というものは全く違っていて、私が真実のほうに一步でも行かないようになっているのが浄土真宗です。他の宗教は真実に出遇うと、真実に近づいたというふうに考えることもあると思います。親鸞聖人は真実のほうに一步も近づかないように『教行信証』を書かれたに違いありません。我々は真実とのあいがあると、真実の側に行くことができたように思ってしまう。

“教化者意識、”と言いますね。教化者意識はなくなるじゃないんです。なくそうと思つたらいけません。それは自力修行になってしまいます。そしてそれは永遠に続きます。なくなるのと分かっていることが大切です。徹底して向こう側に行かない。こちら側にとどまろうとするのが浄土真宗の教えです。

凡夫だというと、少し暗い印象があるんですが、そんなことはないんですよ。知らされることがうれしいのです。それが帰依三宝といわれるわけです。浄土真宗の場合、僧伽といわれますが、一人一人が阿弥陀さまに出遇うということがあると思います。それはお釈迦さまの教え、お経を通して阿弥陀さまに出遇う。

世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来

(『真宗聖典』第二版 145 頁)

「お釈迦さま、いま阿弥陀さまにであいました」と『浄土論』にあるように、天親菩薩がそうおっしゃっています。僧伽は、一人でも僧伽だと思います。そういう一人の人の集まりが、同朋といったり、僧伽ということが出来るんじゃないかなと思います。人間ということ言えば、集まりがないと、自分一人では前に進めませんから、一人一人が阿弥陀さんにつながっている、そういうような関係だと思います。だから、浄土真宗というのは今の時代にとっても合っていると思うんです。個人的な社会になって、浄土真宗の教え、親鸞聖人の教えはこの時代に合っているんだけどなと思います。だからもっと方法を考えれば、広まるはずなんです。外国などでは逆によく分かってもらえるに違いないと思うんですね。一人の僧伽です。曾我量深先生が、一人で同朋会運動をやっています、とおっしゃられたと聞きますが、そういうことなんだろうと思います。

生前に受式する帰敬式

枕勤における帰敬式。これは江戸時代からありました。「おかみそり」と昔は言ったんですね。葬儀というのは、火葬場・葬場に行ってお勤めをして、火葬・埋葬する、それだけが葬儀です。今は通夜からが葬儀の儀式と考えられているようですが、もともと葬場で行われることだけが葬儀です。自宅のお内仏でお別れのお参りをする、そこから棺を担いで葬場まで行く、そこでお勤めをする、

お坊さんが関わったのはそのお勤めの間だけです。お通夜も行かない。同行だけで済ませたりするようなこともあると聞きます。名古屋周辺で昔からそういう形をとっているところがあると聞いています（僧侶も同行としてはお参りに行くそうです）。今は、通夜から全部が一つの儀式だということになっていますが、葬儀というのは、葬場でお勤めして、火葬するなり土葬するなり、そのことだけが葬儀だったんです。

昔は医学が進んでいませんから、死んだと思っても通夜の間生き返ることもあります。葬儀を決めるのはお坊さんです。その人が死んだとか生まれたとか、戸籍を管理したのはお寺です。だから、次の日、その人のところに行って白い布をめくって、亡くなっていることを確認して、葬儀をすることになるのです。それまでは生きています。死んでないんです。お坊さんが行って、そこで死の決定です。お坊さんが死の決定をした。通夜というのは死を確かめる、そういう意味もあります。だから、枕勤というのは、その人が亡くなったからお勤めしているのではないのです。まだ生きているその人の最後の法会だと、臨終説法だと、そういう心持ちで僧侶は枕勤の時に帰敬式をしなくてははいけないんです。

もともとはそういうことだったのです。僧侶が死を決めていたわけですから。今は病院で死が決められますので、僧侶が行った時には亡くなっているということで、枕勤も亡くなっている前提で儀式をするというふうに変わってきたわけです。今でも、亡くなる時に枕元で説法する臨終説法をしたという人を知っています。本来はその人が主催する最後の法会という意味で枕勤がある。だから、本来は生前に受けるべき帰敬式を枕勤で行うということは、その人が生きているということで、生きている人にするように帰敬式をする。それが本来のあり方なのだろうと思います。

帰敬式の歴史

帰敬式の意義、同朋会運動と帰敬式ということについてお話しします。「帰敬式実践運動」が1996年から始まりました。それまでも帰敬式はずっとされていたわけですが、96年に住職さんが門徒さんに帰敬式を「枕勤め以外でも」執行できるようになりました。それが大きな変化です。たくさんの人に受けてもらおうと、そういうふうに変ったわけです。そのことについては、当時の能邨（英士）宗務総長の演説に書かれています。それがしばらく続いて、2005年の参議会の会派の幹事長さんが議員を代表して、宗祖750回忌が来る時に、我々参議会の者は何が出来るのかということで、100万人の帰敬式受式を目指したいということをおっしゃったんです。それを受けて帰敬式がテコ入れされたわけです。実質的には年間一万人くらいです。今は一時よりも減ってきています。ともかく帰敬式を受けていただいて仏法に触れていただく、そういう機会になっていったらと思います。今、さらに「帰敬式法座」がご門徒さんに対して行われています。宗憲にあったように、ご門徒は帰敬式を受けるものだということですが、帰敬式を法座でを受けていただいて、そして推進員養成講座のような、もう一つ次の講座に進んでいただきたい、そういう方向で考えられているようです。

帰敬式の歴史、三帰依の始まりということですが、それは、仏教のごく初期の段階にあります。

初めにも触れましたが、ヤサという不良の若者、そういう人が仏法にピンときたんじゃないかというふうに、ある先生がおっしゃっていました。なるほどそういうこともあるかと思います。まじめに勉強した五比丘などは何日もお釈迦さまの話を聞いて納得したというんですが、ヤサという人はきっとお釈迦さまの顔を見て、話を聞いてパッと閃いたのではないか、そんな想像はおもしろいですね。そして、その時に一緒に遊んでいた四人の友達も出家したんです。『大無量寿経』の最初に五比丘の名前があります。

尊者了本際・尊者正願・尊者正語・尊者大号・尊者仁賢（ここまでが五比丘です）・尊者離垢・尊者名聞・尊者善実・尊者具足・尊者牛王（『真宗聖典』第二版1頁）

「名聞」というのがヤサです。四人の友達がいて、離垢・善実・具足・牛王、あわせて五人が不良仲間です。この名聞という人の家族が、初めて優婆塞・優婆夷となった。教団の始まりに在家の弟子たちもいた、男性も女性もいたのだということになります。

在家であろうが僧侶であろうが一緒

浄土真宗では在家の方に対して「おかみそり」というものがありました。『稟承餘艸』という書物でわかります。これは「相伝」といわれる系統のものなんです。「稟承餘艸」とは「いただいたことを記したメモ、というよう意味です。どちらかと言うと、覚如上人以降、歴代の門首たちが学んできた教化、そういうものを文章にしたものです。それからもう一つの流れで、「学寮」の教学があります。こちらが宗派のオモテ看板。教化といっても別々の系統があって、それがちょっとケンカしていることが書かれているんです。最も彼らに明確な学派意識はなかったと思います。後になって、私たちが説明しやすいのでこう分類しているだけです。

相伝文書『稟承餘艸』に基づいて教化を行っていた肥後光行寺法幢の一類が1806年、「調理御糺」を受けた。要するに、『稟承餘艸』について勉強している人たちが、そんなものは真宗の信心とは違うということで、門首に命じられて、学寮というオモテの学校の先生方に怒られた。その様子がここに描かれています。

『稟承餘艸』「剃刀頂戴之事」

当家の己証は、在家一同の宗意なれば、自己の随意に僧形となることをゆるさず。必ず命によりて僧分となる古実なるが故に、貫首の剃刀を戴くを僧形免許の時とす。これによりて僧分の急要なれば、この式にもるべからざるものなり。しかるに又、僧分のみ剃刀を戴き、在家にその式なくては隔歴の凡情より、形につきて一同の義を失するに似たるを以、在家も亦必ず剃刀を戴を以て、一味等の味の身心平等を顕す基本の古実なりと伝る所存也。

要するに、在家であろうが僧侶であろうが一緒だから、得度もおかみそりもしますよというのが『稟承餘艸』という文書に書かれている内容です。これは今の浄土真宗理解と同じようなことが書かれています。この時のおかみそりは髪の毛をちょっと剃ったと思います。おかみそりをしているということは僧侶と同じ形をとると、そういう建前です。一緒の形にするんだということが書かれ

ています。

ところが、それは違うということが『稟承餘艸評破』というものに書かれています。

『稟承餘艸評破』「剃刀頂戴之事」

(前略) 破曰。そもそも当流に於て在家に剃刀を許したまふこと、その初を知らず。祖師、蓮師の御時代にこの式ありともおもはれず。本と剃髪して法名を頂戴することは死亡の時の儀式なり。それを存生に志あるものは剃髪を頂き、法名をもらい、死亡の節、それを間に合わせるなり。僧分のみ剃髪して在家にこの式なきときは、身平等の義が立たぬによって、かみそりをあてたまうと云義は決てなきこと也。

これは『改邪鈔』にあったように、形が違うからといって門徒として違うわけではないんだから気にしないでいいというような、そういう論理をここに持ってきています。ただ死亡の節の儀式を先に間に合わせているだけなんだと。さらに『稟承餘艸』では、次のようにいいます。

『稟承餘艸』「法名授与之事」

当宗の法名は、通仏教の軌則を以て法名を釈氏にかかるのみ。坊主分のものは法名・実名の二を名づく。在家も貫首より剃刀頂戴のとき、法名を拝受するの法則なり。もし存日に違なく死亡の者は、手次道場の僧分より剃刀の式を授り、本山に礼物を捧げ、必ず法名を戴くべきなり。これを非僧非俗の儀式、辺鄙在俗まで、一味平等ならしむるの法則なりと伝る所也。

いま言っても通用するようなことがここに書かれています。それに対して、

『稟承餘艸評破』「法名授与之事」

(前略) 破釈。前の剃刀の下に同じ。法名を授るも剃刀を頂戴するも俱に死亡のときの儀式を引あげて、存生の間にこれを願ひ、これを許したまふなり。全く僧俗一同の法則にあらず。また在家の非僧非俗の義あるにあらず。

在家は非僧非俗なんか必要ない、俗なんだからと。僧侶に非僧非俗があるんだと。僧俗一同などという必要もないんだと。そもそも一緒だからと。これも論理的にはそんなに違ってないんですけど、いい方がひどいです。

これには理由があって、1803年にお西(浄土真宗本願寺派)で「三業惑乱」があるんです。ご信心をどう表現するか、南無阿弥陀仏と声を上げて言わなきゃならないという人と、いや静かに南無阿弥陀仏というだけでいいんだという人と、宗派で二つに分かれて争いになりまして、宗派の中で解決がつかず、京都所司代という幕府の役人が間に入ってそれを整理しました。ご門主引退です。これ以来、お西の教学はずいぶん紋切り型になって、自由なことはあまり言わなくなったと言われています。お東(真宗大谷派)でも、今でも通用するような、僧俗一緒であるということを言うのは、その当時としてはたぶん憚られたのだと思います。学寮は自己規制をしたと想像されます。僧であろうが俗であろうが同じである、浄土真宗の教えではそうですよ、でも、当時の社会において、そんなことはあんまり言ってもらっては困るわけです。だから『稟承餘艸評破』では「稟承餘艸」を批判せざるを得なかったと想像しています。学寮はオモテの意見です。これを幕府側が見ている

わけです。しかしながら、江戸時代でもはっきりと、僧俗一緒であるということがいわれていたということは、大変なことだと、そのように感じていただけたらいいと思います。

「おかみそり」が「帰敬式」となったのは明治9（1876）年です。それが1982年から、『改悔文』を読む形から「三帰依文」を読むという形に代わりました。

歴史を紹介したのと、得度式も帰敬式も形は同じだということを確認しました。得度式で僧侶になるのも、帰敬式を受式するのも、仏弟子となるという形を通して、浄土真宗の教えに触れる、そして往生して成仏する、そういうところにあるんだということは、これは変わらないことだと思います。ただ、浄土真宗は儀式といっても他力ですから、すでに果があり、その果を真似ていくと、そういう形になっているという特徴があるのかと思います。帰敬式もそうだと思います。

ご門徒がされるのは帰敬式、お坊さんがするのが得度式、そういう違いがある。それだけと言え、それだけです。どちらにしても、真宗門徒になるというところでは変わらない、と考えていただきたいと思います。